

五日間にわたった「モン
ルー・ジャズフェスティバル」
が終ったあと、北歐三国を
経て、当初のスケジュール通
りに東ヨーロッパのチェコを
初めて訪ねることにした。こ
の国に行ってみたくて考えた
わけは、いたって単純なもの
だ。

六四年秋のバリ滞在中、毎
夜のようにクラブ「ブルーノ



「ト」に出かけたが、ほとん
どぎまぎして入ってすぐ右手の
カウンター席に座ることにし
ていた。そこがミュージシヤ
ンたちの憩いの場所だから親
しくお話をできたからである。
ある夜、隣の席に座って熱心
に演奏に耳を傾けている長い
金髪の美しい少女がいた。ア
メリカ人のジャズメンと、と
てもきれいな英語で話してい

たはたち前に見えたその少女
に、旅先の気やすさから声を
かけると、すぐ打ちとけた彼
女は、チェコのプラハからワ
ルボンヌ大学に留学中の学生
であること、故郷の街にもシ
ヤスクラブが一軒あってよく
出かけていたことなどを明る
い表情で話してくれた。愛く
るしく知的な少女との会話
が、とても良い印象だったか
ら、いつか必ずプラハに行っ
てみよう——そんな心に決めた
のだった。

落ち着いた街プラハ

毎度ひとり旅の気やすさか
ら、どこに行へにも大した抵
抗もなかったけれど、プラハ
に向かう飛行機が国際線では
見ることもなくなくなったア
ロペラ機だったのには、ちょ
っぴり不安を感じたが、降り
立ってみれば、そこは西側よ
りも、むしろ落ち着いた街の
たたずまいに、長い歴史と伝
統の重みがあって、足をのぼ
して良かったなあと思つたも
のだ。

奇遇、チェコと日本で
ハマ一家と知り合う

たスタイルの迫力あるヴァイ
ブを聴かせた初老のミュージ
シヤンと、やがて加わった声
量、唱法、体形すべてにエラ
を彷彿(ほうふつ)させる女
性シンガーとが一体となつて

河のほとりにほど近く、何の
変哲もないお店ではあったけ
れど、ステージに迎えたのは
若いリズム隊をバックに、ま
るでライオネル・ハンプトン
をもっと少しモダンに色づけし

プロ並みの教授夫妻

ステージを終えて休息した
ヴァイブとウォーカルのお二
人が、ブレイ中とはがらりと
変わっておだやかに上品な風
貌(ぼう)な女性について誘われて
ごく自然に言葉をかわすつ
ち、驚いたことにその人たち
は実は医学部の婦人科教授と
その夫人と分かったのだ。何
しろ並のプロではとてもかな
わぬ全身ジャズとでもいわん
ばかりのあのブレイぶり、今
もはっきり目に浮かぶような
見事さだったんだから——。

お話を飛んで七〇年。バー
クレイ留学を一年で切り上げ
て帰国したヤンさんご当地
雅章が満を持して結成したの
がキーボード、2ドラムの
セクステットであった。アー
ト・ブレイキーの「モーニ
ム」と同じく、だれもがつい
口ずさんだ名曲「ダンシング
・ミスト」をひびきさせて一躍
人気グループのリーダーとな
ったブレイさんだが、名古屋公
演のあと二人の白人青年を伴
って岡崎にやってきた。さつ
ままでパワフルなドラムをた
たいていたその男を紹介し
て、「彼の名はヤン・ハマ
ー。パークレイで机を並べた
仲間だけど本当はすごい才能の
ピアニストなんだ。もう一台
のキーボードを弟の雅洋がや
ってるからドラムたたいても
やるるんだけど本職顔負け
むヤンの表情は突然、少年に
なつてしまった。



ヤン・ハマーが1968年、ミュンヘンでトリオで録音したアルバム

「それ
僕のお親だ。会っていないん
だ。いや会えないんだ」。
「そうだ、あの時プロフェッ
サー・ハマーと名乗られた。そ
してあのあとワンのチェコ侵
攻があったんだ。果たして祖
国に帰れる日が来るのか。目
をつるませて両親をなつかし
くする表情は突然、少年に
なつてしまった。

(内田 修)